

北海道釧路市材木町 5 遺跡出土の湖州鏡について

西 幸 隆*

Kosyu-mirror from Zaimoku chō 5 site in Kushiro, Eastern
Hokkaido

Yukitaka Nishi *

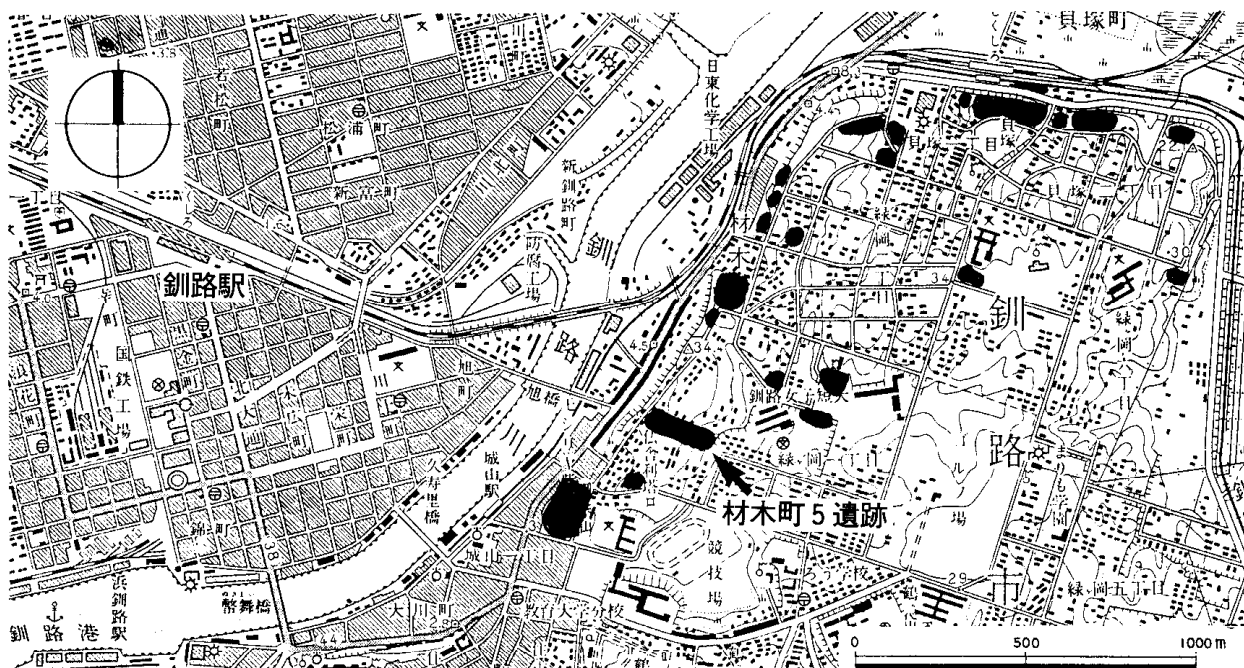
1 はじめに

釧路市材木町 5 遺跡は、釧路市材木町 7・8 番地に所在し、釧路市街地を二分する釧路川の河口近くの左岸の台地、即ち、海拔高度20～30m 前後の釧路段丘面に位置する。同一台地の北側に縄文晩期の緑ヶ岡遺跡（緑ヶ岡 1 遺跡）が隣接し、南側には国指定史跡モシリヤチャシを望むことができ、材木町から緑ヶ岡・貝塚町にかけての一带には大小の遺跡が点在している（第 1 図）。この地域は、昭和40年代前半より急速に宅地化が進行し、昭和 8 年の川合真平氏による「釧路地方ノ堅穴」（川合 1933）に示された数百軒に及ぶ擦文文化期の堅穴住居跡の面影はない。

宅地化に伴って交通渋滞を緩和するため、遺跡のをせる台地を東西に切り込む形で「緑ヶ岡トンネル」工事が計画された。釧路市埋蔵文化財調査センターでは、事前調査として昭和62・63年度の二ケ年に渡る発掘調査を実

施することとなり、第一次調査として昨年 5 月18日より10月29日にかけて、3,666㎡についての調査を行ったところである。その結果、遺構として縄文早期の堅穴住居跡 7 軒、土壌51箇所、擦文期の堅穴住居跡10軒、土壌 1 箇所が検出された。出土遺物として、縄文早期のテンネル式土器、中期の北筒式土器、続縄文期の後北 C² 式土器、オホーツク文化期のトビニタイ土器、擦文期の擦文土器など8,000点近くの遺物が出土した。このうち、擦文期の堅穴住居跡床面より、北海道ではこれまでに出土例のなかった「湖州鏡」が出土したのでここに紹介し、あわせて擦文期における湖州鏡の位置についても若干の検討を加えたい。

尚、本報告書の刊行は昭和63年度の調査終了後を予定しており、詳細については本報告で述べることとし、本稿では湖州鏡と湖州鏡が出土した堅穴住居跡を紹介するに留めたい。



第 1 図 釧路市材木町 5 遺跡と周辺の遺跡（●）位置図

* 釧路市立博物館（Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido）

2 湖州鏡と鉏路市材木町5遺跡出土の方鏡

湖州鏡は、宋代（960～1279年）に中国の浙江省湖州地方で造られた鏡で、日本や朝鮮半島からも出土しており、国内では平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての経塚や山岳信仰遺跡などから出土している。国内における湖州鏡の分布（出土鏡）は、東北地方から九州地方まで広範囲に及んでいる（第2図）。

湖州鏡には、いろいろな形があり、円形・方形・隅入方形・六花形・八花形・柄鏡などさまざまで、多くは文様をもたず素文であるが、中には蜻蛉や蝶の文様をもつ鏡があり、鏡背面に製造店舗の名が鋳出されているものと、そうでない素文鏡がある。

今回出土した鏡は、方形を呈し鈕の右側部分に銘があり、磨耗して全文を解読できないが「湖州真□□□□□□□」の三文字を読みとることができる（写真1・2）。大きさは、縦9.9cm、横9.8cmのほぼ正方形で、厚さ3～5mm、重さ215.76gを計る。鏡の出土状況については後述する。

3 湖州鏡の分布と方鏡の出土遺跡

経塚や山岳信仰遺跡などから出土している湖州鏡は、前述したように東北地方から九州地方にかけて広い範囲にわたり分布している。しかし、各種の形態の鏡が一樣に広がりをもつものではなく、形態により分布傾向の異なることが指摘されている（久保1986）。即ち、六花鏡は、九州地方に多く東日本に分布していない。円鏡は、

平安京周辺に多く、今回本遺跡から出土した方鏡は、東北地方や近畿地方の日本海側を中心に分布し、それぞれが比較的片寄った分布傾向を示している（第2図）。こうした背景には、それぞれの形態の湖州鏡の流入経路や流入時期と深い関わり合いをもつとする見方があり、本遺跡の湖州方鏡の流入経路等を検討する上でも極めて重要な意味をもっているといえる。

ここでは、銘をもつ湖州方鏡の出土遺跡を取り上げ、湖州鏡が国内において用いられた時期について把握しておきたい。

(1) 岩手県丹内山神社第2経塚

割石を組み合わせた石室の底石の上に、経容器として中国宋代の白磁四耳壺と、一辺の長さ15.8cmの湖州方鏡、及び宋銭（祥符元宝）一枚が発見されている。（草間1965・奈良国立博物館1977）。このうち、湖州方鏡はほぼ正方形で鋳出銘らしきものがあり、型くずれのため判読できる状態でないという。遺物は、いずれも中国宋代の舶載品からなり、他の埋納遺物はない。

(2) 秋田県平鹿郡大森町八沢木新庄館

新城館、神宮館とも呼ばれる。この館の神宮沢に寺屋敷があったとされ、ここから平安鏡が出土している（秋田県教育委員会1981）。この鏡は、「武藤一郎コレクション」（秋田県立博物館1978）にあり、山吹双雀鏡・松海波千鳥鏡・菊枝双雀鏡と共に、蜻蛉蝶鳥湖州方鏡が1面含まれている。

湖州方鏡は、一部を欠損しているが、「湖州真石家念二叔照子」の銘をもつ。ほぼ正方形で、一辺が9.7cmを

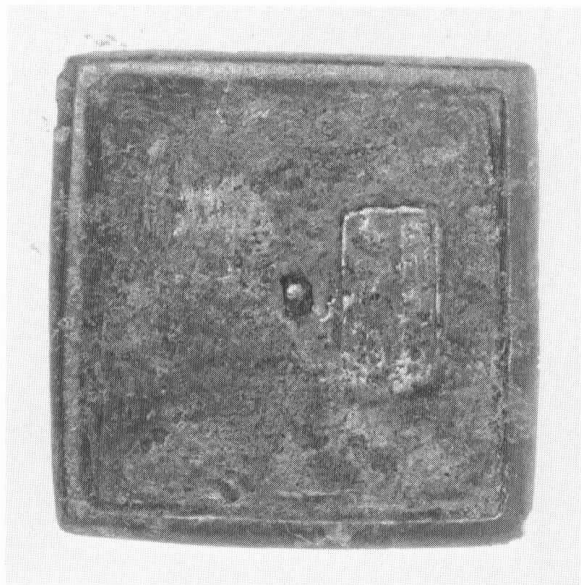


写真1 湖州方鏡 背面



写真2 湖州方鏡 鏡面

計り、縁高0.3cm、隅に蜻蛉、蝶を配し、上下左三方に鳥が描かれている（大和久・奈良1960）。

(3) 山形県東田川郡羽黒町羽黒山頂御手洗池

出羽三山神社前の御手洗池（鏡が池）から、600面にもものぼるといわれる鏡が検出されている。これらは、一括して「羽黒鏡」と呼ばれ、室町・江戸時代の鏡も含むが、平安時代後期から鎌倉時代前半期の和鏡が多くを占めている（前田1984・1985）。

これらの鏡の中に、円形・方形・隅入方形の湖州鏡が29面含まれており、銘をもつ方鏡が13面ある。湖州鏡もそうであるが、かつて二次的に火中したとの説があり、色調に特色をもち比較的薄手である。大きさは、一辺がほぼ8～9cm代で10、11cmを計るものもある。

方鏡の銘文は、破損して全文を欠く資料もあるが、「湖州真石家念二叔照子」と「湖州真石家二叔青銅照子」があり、前者が多い。また、「元皇通宝」の貨銭文をもち、「太□□□」の銘のある方鏡が一面ある。

(4) 福島県会津坂下町塔寺経塚

銅製経筒と共に湖州方鏡が1面出土しており、鏡背に「湖州真石家念二叔照子」の銘がある。また、鏡には木製容器を伴う（会津坂下町1976）。

(5) 福井県敦賀市深山寺経塚

20基近くの経塚からなり、このうち7基の発掘調査が

行われ、湖州鏡は3号経塚から出土している（久保1986）。湖州方鏡は、「湖州真石家念二叔照子」の銘をもち、縦10、15cmを計るほぼ正方形である。

湖州鏡や素文鏡、松鶴文などで構成される3号経塚では、共に10面以上の鏡を出土した1号経塚との間に鏡構成に差異が認められるとされ、鏡の入手経路や入手時期により鏡群の構成が異なる可能性のあることが指摘されている（久保1986）。

(6) 京都府舞鶴市油江経塚

直径45cmの石室内に銅製経筒が埋納されており、石室内より9面の鏡が出土している（東京国立博物館1967・久保1986）。鏡には、松喰鶴鏡・網代双鳥鏡・草花双鳥鏡・松双鶴鏡があり、これらと共に湖州方鏡2面と素文方鏡1面が出土している。この他、経巻残欠・木器残片・櫛残欠がある。

湖州方鏡には、「湖州真石家念二叔照子」と「湖州真石家念二叔青銅照子」の銘がある。时期的には、12世紀前半から中頃とされ、出土した湖州方鏡と素文鏡がいずれも方鏡であるところから、これらの方鏡が一括してこの地域にもたらされた可能性もあるという（久保1986）。

(7) 京都府京都市左京区花背別所経塚

大正10年と昭和2年の二度にわたって7基の経塚が発見されており、このうちの第1経塚から湖州方鏡が1面出土している。遺物には、木製経筒蓋2個・青白磁合子蓋1個・菊枝双鳥鏡・流水双鳥鏡・土製火舎・土製花瓶残欠・土製六器などがあり、宋銭14枚・刀剣二口も伴出している（東京国立博物館1967・奈良国立博物館1977）。

湖州方鏡は、縦・横とも9.5cmで「湖州真石家念二叔照子」の銘がある。

第1経塚の時期については、この経塚内から出土した火舎・花瓶・六器と、第3経塚の仁平3年（1153）銘経筒に同伴した土製品とは同形式にあるとされ、12世紀中頃として位置づけられる。

(8) 三重県伊勢市朝熊山経塚

昭和37・38年に二十数基の経塚が発掘され、その際に松喰鶴鏡、山吹双鳥鏡、松双鶴鏡、萩双鳥鏡など20面の鏡が検出されている。この中に、縦7.1cmの湖州方鏡が1面含まれており、「湖州真石家念二叔照子」の銘がある。时期的には、主体となる鏡からみて、12世紀代であるという（久保1986）。湖州方鏡と共伴した遺物等については、未



第2図 湖州鏡・素文鏡出土地（久保・1986）

報告のため明らかでない。

(9) 香川県三豊郡詫間町船積寺経塚

方形一面と六花形二面の湖州鏡が出土している(矢島1947・東京国立博物館1967・久保1986)。このほか、松喰鶴鏡・山吹双鳥鏡・草花水鳥鏡・水辺双鳥鏡や青白磁草花文合子などが出土している。

湖州方鏡には、「湖州儀鳳橋石家真正一色青銅鏡」の銘文をもつ。同一銘は、国内では方鏡の他の出土鏡には認められないが、円鏡の中に同じ銘文がある。

以上、銘のある湖州方鏡の出土した9遺跡を紹介したが、ここで本遺跡出土の資料と比較し二・三の点について検討しておきたい。

第一に、鏡背面に施される銘文についてであるが、すでに触れたように、方鏡では種類に限られるようである。「湖州真石家念二叔照子」が最も多く、「湖州真石家念二叔青銅照子」「湖州真石家二叔青銅照子」及び貨銭文をもつ一例が加わる程度である。本遺跡の方鏡は、字数及び表面の観察から「湖州真石家念二叔照子」と考えられる。円鏡など形態の異なる鏡や、朝鮮半島・中国での湖州鏡の銘には、真石家の家名のほか、真正石家、真石念二叔家、石家、西石家など幾つかの家名をもつものがある。湖州方鏡のうち、香川県三豊郡詫間町船積寺経塚に見られた儀鳳橋石家は、唐の高崇の儀鳳年間に建てられた儀鳳橋の名を用いて位置を示し、石家のうちの所在を明らかにした銘という(矢島1947)。この銘の方鏡が真石家の方鏡と同一時期に国内にもたらされたものか定かでないが、共伴した六花鏡との関係からも他の8遺跡の方鏡とは、同一視できないと考えられる。いずれにせよ、岩手県丹内山神社第2経塚や京都府舞鶴市油江経塚、福井県敦賀市深山寺経塚などの出土例から、また、方鏡の分布などから湖州方鏡が一括して国内に持ち込まれた可能性も否定できない。しかし、一方では湖州鏡が日本で踏み返し鑄造された可能性があるとの指摘もあり(前田1985)、現段階では即断できないようである。

第二に、国内における湖州鏡の用いられた時期についてである。方鏡では、伴出遺物との関係から、舞鶴市油江経塚での12世紀前半から中頃、京都市左京区花背別所経塚の12世紀中葉など時期の明らかな例があり、他の形態の湖州鏡の伴出遺物からも、平安時代から鎌倉時代前半までの時間幅が設定されている。

また、出土鏡ではないが、神社の奉納鏡の中に紀年線刻銘をもつものが紹介されているので(前田1985)、ここで引用し付け加えておきたい。鹿児島県川内市新田神社の奉納鏡に22面の湖州鏡があり、このうちの3面の素文鏡(円鏡2面、変形八稜鏡1面)の背面に記されてお

り、ひとつは「八幡宮 奉施入鏡一面事 右志者為字太郎丸除延命施入如件 建永二年十月一日 太郎丸敬白」とあり、建永2年(1207)の年代を知ることができる。また、同じ円鏡に「加(嘉) 偵二年十二月廿五日 和氣敬白」とあり、嘉偵2年(1236)をあらわしている。変形八稜鏡には、「奉施入八幡新田宮 御宝前 建武四年十月廿四日 藤原敬白」とあり、建武4年(1337)が記されている。この3面から、当然ながら舶載された時期までを知ることはできないが、少なくとも13世紀前半においての使用年代を知り得ることができる。

第三に、表面からの観察による個々の湖州鏡の差異についてである。湖州方鏡に限って見た場合、色調、厚さ等に大きな相異が認められる。この背景には、ひとつに舶載鏡か否かという基本的な問題を内包している点がある。例えば出羽三山神社前の御手洗池から検出された羽黒鏡を取りまとめた前田洋子氏は、羽黒鏡に含まれる「湖州……」の銘の鏡について「湖州鏡式鏡」とし、その理由として『中国宋代に浙江省湖州を中心とした地域において製作され日本にもたらされた舶載の湖州鏡か、もしくはその舶載鏡を踏み返したり鏡式を模して日本で製作された仿製鏡であるか、また、いわゆる高麗鏡といわれる朝鮮で製作された鏡に含まれる舶載鏡であるかどうかについてはにわかに判じ難いためである』(前田1984)と述べている。この点から見ても、国内における湖州鏡が個々にどのような性格をもっているのかは現時点においては明らかではないと理解される。^(註1)

では、次に外見上の観察から本遺跡出土の資料と前述した湖州方鏡について見ておきたい。御手洗池の方鏡は、比較的薄手でありなおかつ軽い。色調も特徴があり他の羽黒鏡同様二次的に火中したとも言われている。色調の表現も研究者間により異なるが、羽黒鏡について「黒色あるいは暗赤茶色を呈したあめ状の被膜が付着したり、墨流し風に地金に浸み込んでいるものもある」(前田1984)というように、比較的黒みを帯びたものや赤茶色があった色調のものがある。従って、本遺跡の青白色に近い色調をもつ方鏡とは全く異質であると言える。また、秋田県平鹿郡大森町八沢木の方鏡や、福島県会津坂下町塔寺経塚など東北地方出土の資料は、御手洗池の資料と同系統の可能性が高い。むしろ、実見した限りにおいては京都市左京区花背別所経塚出土の湖州方鏡に酷似している。このような、外見上の類似、相異は、本遺跡出土資料の流入経路や時期にも大きく関係してくると思われる。

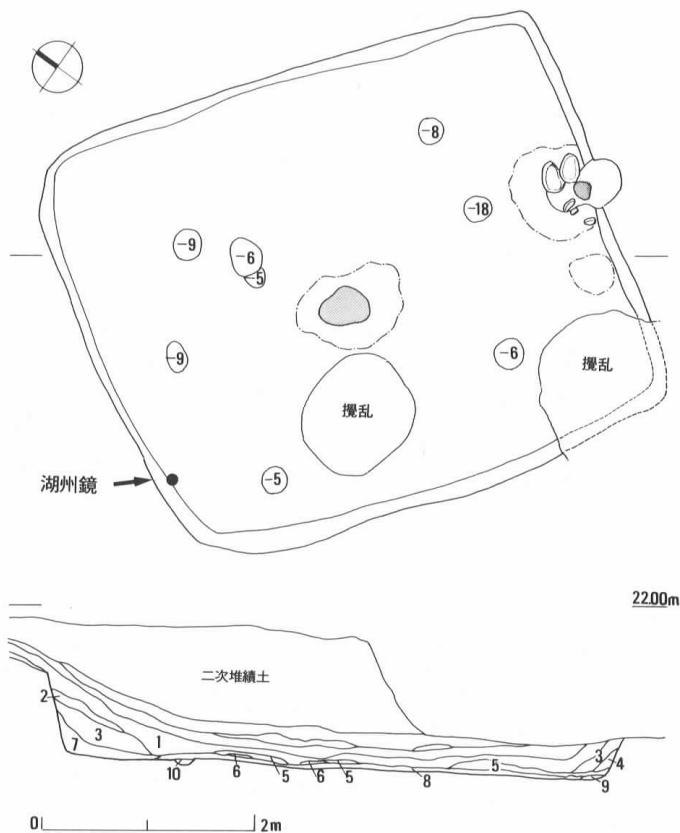
鏡が舶載鏡であるか、仿製鏡であるかなどについては、成分分析により数多くの比較資料をもつことが必要であ

り、この点については既に指摘されているところである(樋口1981)。

尚、本遺跡の資料について蛍光X線による定性分析をおこなったところ、銅・錫・鉛の三主成分を含み比較的錫の多い青銅であるという結果が得られている。^(註2)鏡背面の2箇所を対象にしたところ、表面が腐食していない部分では錫が多く、錫の鍍が浮き出ている黒色部分では、さらに錫のピークが高く、逆に鉛のピークの高さが半減し、スペクトルが異なるという。これは、鍍による違いとされ、本来は前者のような蛍光X線スペクトルを示すという。今後、銅と共に錫・鉛の含有量についても定量分析をおこなう予定でいる。

4 擦文期における湖州鏡の位置と性格

道内における出土鏡は、これまで2箇所で見られている。寿都郡寿都町朱太川左岸のアイヌ期の墓から円鏡3面が出土しており、このうち1面は「日光鏡」であるとの報告がある(大場ほか1963)。また、桧山郡上ノ国町勝山館跡からは、菊花双鶴鏡・蓬萊鏡など4面が検出されており(上ノ国町教育委員会1981)、16世紀の遺物によって占められている。両遺跡ともに伝世鏡で、道内においてこれを遡る時期の出土鏡はこれまでに例がない。



第3図 湖州鏡が出土した擦文期の竪穴住居跡(第15号住居跡)

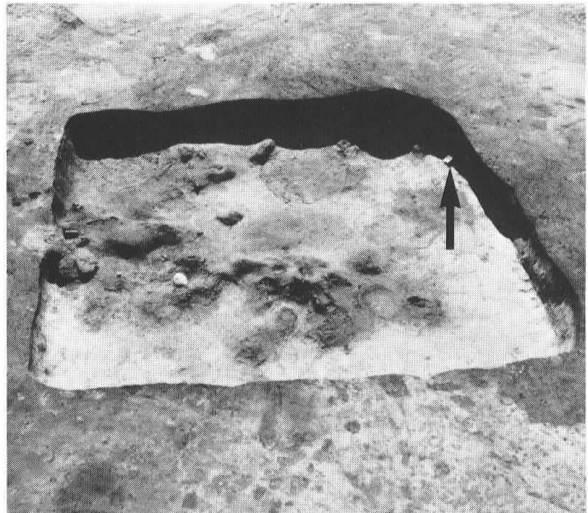


写真3 第15号住居跡と鏡(←)の出土状態

最初に、本遺跡出土の湖州鏡の出土状態について記しておきたい。第15号住居跡とした竪穴住居跡は、5.05m×4.28mを計る隅丸方形を呈し、東側壁に竈をもつ。この竪穴は、これまで知られる擦文期のそれと異なる点は見いだせず、同一台地で検出されている他の9軒とも形態的にみても差異が認められない。ただし、火災に遭ったとみられる形跡があり、炭化材や焼土が住居跡内で広範囲にわたり分布している。鏡は、第3図に示したよ

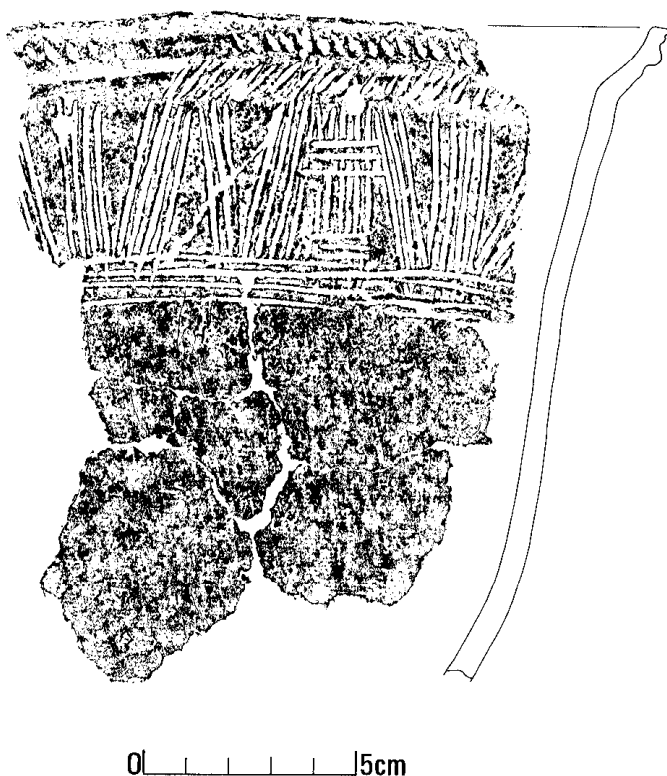
うに、住居跡西壁の床と壁の間に鏡面を上にし斜めに置かれた状態で検出された(第3図)。出土状態からみても意図的に置かれた印象を強く受ける。この竪穴住居跡床面からは、第4図の擦文土器が出土しており、また、メノウ質の表面を楕円形に研磨した遺物も得られている。

これまでに、擦文期の遺跡から出土している遺物としては、擦文土器や紡錘車などの土製品、刀子をはじめとする鉄製品や靱羽口、木製品、繊維製品などが知られている。このほか、明らかに大陸から移入されたとみられる資料も幾つかある。貨幣の出土例が2箇所があり、野付郡別海町浜別海遺跡の擦文期の第1号竪穴からは北宋銭が出土している(北構保男ほか1971)。「元豊通宝」で初鑄が1078年である。方孔の部分を再加工して円形に拡大している。ただし、床面より数cm上から出土しており、竪穴床面出土の擦文土器^(註3)に伴出するかどうかは明らかでないと言う。同じ北宋銭が古宇郡泊村茶津四号洞窟にもある(竹田輝雄1970)。「皇宋通宝」(初鑄1039年)で擦文土器の中から検出されている。これらの遺物が本州もしくは樺太を経由して大陸から持ち込まれたものか渡来経路については即断できないが、これから得られる情

報は、既に指摘されているように、伴出した擦文土器が北宋銭の初鋳年代を遡るものではないことを知り得る程度である（菊池1980）。しかし、流入経路を検討する上でも数少ない移入品として留意する必要がある。このほか青銅製品の出土例もある。常呂郡常呂町栄浦2遺跡の擦文期の竪穴住居跡より青銅製のボタンが出土している（東京大学文学部・1964）。径3.5cmの笠状を呈するスキタイ銅器で、大陸から持ち込まれたと考えられる資料のひとつである。

一方、オホーツク文化期においても、これまで青銅製品の出土例がある。青銅製や錫製の鈴、刀の青銅金具などが知られており、ほかに鉄製品や銀製品の報告例もある（米村1950）。オホーツク文化期を例にとっても大陸からの文物が比較的間断なく北海道へ流入されていたと考えられ、そうした資料が極めて少ない擦文期にあっても、オホーツク文化を介在してある程度の製品が持ち込まれていたであろうことは容易に予測されるところである。上記のような二・三の例からみても、本遺跡出土の湖州鏡が、ひとつ本州のみでなく樺太を経由した大陸からの移入経路を想定することもあながち許されないことではない。

次に、擦文期における湖州鏡の編年的位置について共伴した擦文土器（第4図）をもとに述べておきたい。



第4図 湖州鏡と共伴した擦文土器

擦文土器の編年については、東京大学によるIV期区分（東京大学文学部1964）以降、北大式とI～VI期に区分した石附編年（石附1968・1969）、ブレ擦文とA～Eに区分した菊池編年（1970）、I～V期に区分してさらに細分した佐藤編年（佐藤1972）、常呂川下流域を中心としてa～lまでを区分した藤本編年（1972）、早期から晩期に区分した宇田川編年（宇田川1979）、0～3の大井編年（大井1970）などがある。

本遺跡出土の擦文土器（第4図）は、これらの編年のうち佐藤編年によるIV期終末、宇田川編年による晩期、藤本編年によるj～lに相当しよう。釧路地方においては、この後釧路市緑ヶ岡STV遺跡5号跡の土器（澤編1972）、釧路煉乳工場裏竪穴出土の土器（宇田川1979）などを経て擦文期の終末を迎える。従って、湖州方鏡の出土した竪穴住居跡は、擦文期においても比較の後半で、むしろ終末期に近いものとして位置づけることができる。そこで、次に湖州方鏡の使用された時期を把握する上でも、一応の目安として終末期の年代について紹介しておきたい。

擦文期の年代については、その開始時期がおおむね8世紀後半に位置することは大方の認めるところであるが、終末年代については研究者間により大きな相異があることは、既によく知られているところである。

道東部に限定した見解としては、終末を16世紀から17世紀までを下るとする見方があり（大井1970）、道央部などにくらべ比較的遅い時期まで擦文期が続いたとされる。また、これに近い年代として、内耳土鍋との関係から室町時代末期～江戸時代初めとする見解もあり（前田1976）、ほぼ同じような見方もある（桜井1962）。これらとは別に、平安時代末から鎌倉時代初期（石附1969・菊池1970）、また、少なくとも鎌倉時代には終末を告げていた（吉崎1972）、あるいは13世紀末葉（宇田川1980）などの見解があり、ほぼ12世紀から13世紀前後とする見方が大勢を占めていると考えられる。ここで、終末論については、諸説の見解を紹介するに留めるが、湖州鏡の本州における出土時期とは大きくかけ離れていない点に留意する必要がある。

ちなみに、本遺跡の湖州鏡が出土した第15号住居跡での炭素測定を行ったところ、850±90BP（Gak13580）との数値が得られており、この時期の年代を検討する上で参考となろう。

最後に、擦文期における湖州鏡のもつ性格について考えてみたい。

鏡が経塚や山岳信仰遺跡などのほか、竪穴住居跡など集落内で検出されている例が幾つか知られている。関東地方における平安時代の集落遺跡出土鏡を取り上げた菊池誠一氏によると、この地域において住居跡内からの出土鏡が15例あり、このうち被災したとみられる住居跡が1軒含まれている（菊池1987）。床面からの出土例は少ないが、長野県乗落遺跡・長野県判ノ木山西遺跡・千葉県文六第2遺跡では『通有の住居址とは異なった遺構の存在、祭祀遺物との共伴等から、鏡を祭祀に使う呪術的宗教者の存在を指摘することができる。』（菊池1987）とし、祭祀的性格を与えている。本遺跡のような被災されたとみられる竪穴住居跡の床面における出土状態から、擦文社会における精神文化の一側面について言及することは早計と言えようが、前田洋子氏の言う『突然放棄された生活遺構』（前田1986）に該当すると認識した場合においても、必ずしも生活調度具として鏡の性格を位置づける根拠がない。むしろ、出土状態からみて祭祀的性格について検討することが妥当と考える。即ち、後続するアイヌ文化期における祭祀儀礼の延長線上に位置づけて検討すべきである。

5 おわりに

以上、釧路市材木町5遺跡出土の湖州方鏡について紹介し、あわせて関連する幾つかの事項について述べてきた。擦文期において湖州方鏡が出土したことは、この時期の文化内容を把握する上においても極めて意義深いものがある。これまで擦文期は、出土遺物等からも本州産品に大きく依存し本州の文化圏に組み込まれていたとみられてきた。しかし、湖州鏡の本州からの流入を確実に否定できる材料を持ち合わせてはいないが、東北地方出土の資料と異なる点からもむしろ大陸からの流入経路が考えられ、この場合においては、オホーツク文化を介し樺太を経由して大陸からの文物がこの社会にも予想以上に浸透していた可能性を指摘できるのである。湖州鏡が大陸から持ち込まれたと想定した場合、これに関連して、本州における使用年代をそのまま擦文期にスライドできないという問題が生じてくる。しかし、共伴遺物等からも、大方の擦文期の年代である8世紀後半から13世紀前後に組み入れられるものと考えられ、例え伝世鏡としての性格をもっていたとしても、16・17世紀まで下るとは考えられない。従って、擦文期終末の前段階に位置づけられ、本州において経塚や山岳信仰遺跡での出土時期とはそう大きく掛け離れない時間幅を設定できる。加えて、850±90BPの数値にも大きな誤りはないと思われる。

前項でも触れたように、擦文社会において鏡がどのよ

うな性格を有していたかという点については、やはり後続するアイヌ文化期における祭祀儀礼との関わり合いを追及する必要があるだろう。

釧路市材木町5遺跡発掘調査は、昭和63年度においても継続して行われ、今回、遺跡の全体像を把握することなく、急遽資料の紹介を行うこととなり、文献資料も含めて欠落部分が多々あると思われるが、本報告においてその責を果たしたいと考えている。諸先学の御叱正、御教示をお願いする次第である。

最後に、本稿を草するにあたり多くの方々から文献面での御協力や御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

青木 豊（国学院大学考古学資料館）、蛸原真奈美（釧路市埋蔵文化財調査センター）、加藤春雄（釧路市立博物館）、喜多川博也（出羽三山神社）、工藤雅樹（宮城女子学院大学）、久保智康（福井県立博物館）、小林達雄（国学院大学）、小松正夫（史跡秋田城跡発掘調査事務所）、佐々木利和（東京国立博物館）、澤 四郎（釧路市立博物館）、菅谷誉紫子（釧路市埋蔵文化財調査センター）、梶山林繼（国学院大学日本文化研究所）、豊原照司（標茶町郷土館）、西山要一（奈良大学）、野村 崇（北海道開拓記念館）、前田洋子（大阪市立博物館）、松田猛（釧路市埋蔵文化財調査センター）

註1、従って本遺跡出土の湖州鏡についても、現時点では、その性格について即断できない。

2、奈良教育大学三辻利一氏による。

3、大沼忠春氏の御教示による。

引用・参考文献

- 会津坂下町（1976）「会津坂下町史 文化編」
 秋田県教育委員会編（1981）「秋田県の城館」
 秋田県立博物館編（1978）「武藤一郎コレクション図録」
 石附喜三男（1968）「擦文式土器の初現的形態に関する研究」札幌大学紀要
 石附喜三男（1969）「擦文土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」北海道考古学第5輯
 和泉市久保惣記念美術館編（1985）「和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録」
 宇田川 洋（1977）「北海道考古学講座7 擦文期」北海道地方史研究19
 宇田川 洋（1979）「70年代擦文文化の研究」どるめん No22
 宇田川 洋（1980）「アイヌ考古学」

- 大井 晴男 (1970)「擦文文化とオホーツク文化の関係について」北方文化研究 4
- 大井 晴男 (1972)「北海道東部における古式の擦文式土器について」常呂
- 大場利夫ほか (1963)「寿都遺跡」寿都町教育委員会
- 大和久震平・奈良 修介 (1960)「秋田県史 考古編」
- 川合 真平 (1933)「釧路地方ノ堅穴」
- 川村 宗嗣 (1978)「中国古鏡図説」
- 菊池 誠一 (1987)「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格」物質文化49
- 菊池 徹夫 (1970)「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」物質文化15
- 菊池 徹夫 (1980)「擦文文化の終末年代」古代探叢
- 北構保男ほか (1971)「浜別海遺跡」北地文化研究会
- 草間 俊一 (1965)「岩手県和賀郡丹内山神社経塚」日本考古学年報13
- 久保 智康 (1986)「古鏡の美—出土鏡を中心に—」福井県立博物館
- 久保 智康 (1987)「平安後期出土鏡の研究序説」東アジアの考古と歴史下
- 後藤 守一 (1935)「古鏡聚英」
- 佐藤 達夫 (1972)「擦紋土器の変遷について」常呂
- 澤 四郎編 (1972)「釧路市緑ヶ岡 S T V 遺跡発掘調査報告」釧路市立郷土博物館紀要第 1 輯
- 四川省博物館・重庆市博物館編 (1979)「四川省出土銅鏡」
- 竹田輝雄編 (1970)「茶津四号洞窟遺跡・発足岩陰遺跡」小樽市博物館紀要 3
- 東京国立博物館編 (1967)「東京国立博物館図版目録・経塚遺物篇」
- 東京大学文学部 (1964)「擦文土器」オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻
- 奈良国立博物館 (1977)「経塚遺宝」
- 樋口 隆康 (1981)「古鏡研究の問題点」考古学ジャーナルNo185
- 藤本 強 (1972)「常呂川下流域の擦文土器について」常呂
- 藤本 強 (1982)「擦文文化」
- 前田 洋子 (1984)「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」考古学雑誌第70巻第 1 号
- 前田 洋子 (1985)「日本の古鏡—女装美のプロデューサー—」大阪市立博物館
- 前田 洋子 (1986)「和鏡の用途の展開について—出土鏡・水中検出鏡を中心として—」歴史における政治と民衆 日本史論叢会
- 松田 猛 (1980)「釧路地方の擦文土器について」釧路市立博物館紀要第 7 輯
- 季 蘭暎 (1983)「韓国外銅鏡」韓国精神文化研究院
- 矢島 恭介 (1947)「湖州並浙江省諸州の銘ある南宋時代の鏡に就いて」考古学雑誌第34巻第12号
- 米村喜男衛 (1950)「モヨロ貝塚資料集」